
ぼくのもだちが死んだ夜

宮谷あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくのもだちが死んだ夜

【Nコード】

N6866D

【作者名】

宮谷あゆみ

【あらすじ】

ぼくのもだちが死んだ夜に銀色の鰐と出会い、ぼくは月の世界にたどり着く。そしてそこで死んだともだちの歌を聴き、死んだ魂たちの行方を知る。

ぼくのもとだちが死んだ夜、
ぼくはこっそり森に歩いて行って、
ひとりぼっちで泣いていた。

満月みたいなぼくたちの心は、
きつと暗い水の底に沈んでしまったんだ。

ぼくは大声できみの名前を呼んだ。
すると片羽根のコウモリが、
楠のてっぺんからばたばた飛び立って、
水の中にぽちゃんと落っこちた。

なんてこと。

コウモリまで死ぬなんて。

涙が秋の雨みたいに音もなく降って、
水面にたくさんの光の輪を形作っていった。

それらはきらきらとアメジストの光を放ち、
やがて渦巻銀河のようにゆっくりと回り始めた。

中心に何かの影が見える…。

鰐だ。

大きな銀色の鰐が出てきた。

鰐はもみじの若葉のように、

静かに濡れた緑色の瞳で、
じつとぼくの両目をのぞき込んだ。

「ついておいで」

ふわり、

暗い地面をはね上がり、
鰐は夜空を飛んでいく。

星星はいっせいに集まって、

細い光の河となり、

ぼくたちの心のような、

あの満月へと流れていく。

ぼくは鰐と共に、

月の世界にたどり着いた。

虹色の蛍が舞う、

永遠にたたずむ湖に。

風はしんとして、

青白い夜の底にうずくまり、

ぼくは水辺の柔らかい草を踏んで、

そっと湖の声を聴いた。

滑らかな細波の向こうに、

誰かの歌が聴こえる。

どこかで、

きみが歌を歌っている。

「ぼくの歌だ」

虹色の蛍たちはやがてはらはらと、
スノーフレイクのように溶けるだろう。
そして永遠に涸れない湖の、
光り輝く水になる。

太陽が東の空に灯る頃、
ぼくは暖かなうつし身の中で目が覚めた。

さようなら、銀色の鰐。
夢がさめる時、
きみは星星の間を流れる、
風のような歌になるよ。

（後書き）

この物語は絵本向けに書いたものです。シーンごとに絵のイメージがあるので、文章だけでこの物語を伝えることは難しいのですが、物語だけでも読んでいただきたいと思い、投稿しました。

この物語は「死んだ魂たちはどこに行ってしまうのだろう」という悲しい疑問から生まれました。そして死んだ魂たちは、歌のようなものになるかもしれないと私は考えています。何故なら、形を持たない歌は、人々の間で歌い継がれることで生き続けるものだからです。死んだ魂たちもまた、歌い継がれるように生き続けることができますのではないかと私は思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6866d/>

ばくのともしちが死んだ夜

2010年12月9日06時00分発行